
風に呼ばれて

水沢ちぬあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風と呼ばれて

【Nコード】

N3316H

【作者名】

水沢ちぬあ

【あらすじ】

ひまわりを眺めていたら、制服を着てカメラを持った女の人が、にっこり笑いかけてきました。とても暑い夏の昼下がりでした。

ひまわりが咲き始めた。

小四の花栄かえの身長を頭一つ分も飛び越えて、太陽を見上げるように風に揺れている。

終業式からの帰り道、一緒に帰っていた友達と分かれ、一人になって歩き始めて、途中で見つけたひまわり畑。

見つけたというより、気付いたという感じだった。誰かが埋めたのであるう、ひまわりの種が芽を吹いたのを、つい二ヶ月ほど前に見つけて、たびたび観察していたのだった。

一ヶ月前は、自分の身長よりも低かったのにと思いながら、ただじっと眺めていた。

鮮やかな黄色に縁取られた茶色と、その下にするすると伸びる茎。大きな葉は、花栄の手のひらより大きく、濃い緑色がいきいきとしてきれいだった。

じりじりと焼けるような日差しに、汗が滲む。ショートの髪の毛の先端が頬に張り付いた。家に帰るといふ目的も忘れ、ずっと彼らを眺めていた。そうしてもう一時間も経ったような気もするし、まだ十分程度のようにも思える。

どっちでもいいや、まだ眺めていたい。

そうして、ほうとため息をついたとき。ふと視線を感じて、ぱつと振り返る。

高校の制服を着た、女の人立っていた。長い髪を左側で横結びにして、柔らかな笑顔を湛えて、花栄を見ている。

「こんにちは」

「……こんにちは」

歩み寄って来ながら、その人はあいさつした。花栄もぺこりと頭を下げる。

その人の手元を見ると、銀色のデジタルカメラが握られていた。

花栄の視線を悟って、その人はカメラを示す。

「ごめんね、あんまりステキだったから、撮っちゃった」

どうやら、花栄がひまわりを見上げているところを、写真に撮られてしまったらしい。

写真は嫌いではないけれど、不意に撮られるのはちょっと恥ずかしさがある。でも、撮られてしまったものはしょうがないと思い、別にいいよ、と言った。

「私、九重ここのえひこと。君は？」

「島津花栄」

「ああ、そっか。やっぱり菜央なのおの妹さんね？」

うん、とうなずく。菜央は、花栄の六つ上の高校一年生。物静かな花栄に対して、活発的な性格のお姉さん。

「お姉ちゃんの友達？」

「そうよ。同じクラスだね。よく妹さんの話を聞くから、会ってみたいと思っていたの」

ひことは、口元がそっくりだわ、とくるくる笑った。菜央は学校で、花栄のどんな話をしているのだろう。

「私、写真部に入っていてね。もしかしたら、この写真、展覧会とかで使うかもしれない。いいかな？」

「え……うーん。……、うん」

少し考えてうなずいた。その写真を気に入ってくれたのだろうと分かった。それなら、好きにしてもらってもいいと思った。

「ありがとう！ ごめんね、勝手に撮っててお願いまでしちゃって」「ううん、いいの」

「そっか。……おおっと。じゃあ、用事があるから。またね」

腕時計で時間を見るやいなや、ひことは手を振って、花栄に背を向けて走り去った。

しばらくひことが行った方向を見つめて、私も帰ろうと歩き出した。

夏が過ぎ、秋の気配が感じられるようになった十月上旬。

菜央の通う高校で、文化祭が行われるとのことで、日曜日の昼下がりに、花栄も友人三人を連れ立って見物に行った。

ずらりと並んださまざまな屋台は、全て生徒たちが取り仕切っている。奥のステージでは、吹奏楽や手品ショー、漫才などを催していた。他にも、お化け屋敷やレストラン、部活動体験コーナーまである。

姉の菜央は演劇部所属で、今はちょうど劇で主役を演じているところだと、掲示板に張り出されたプログラムから読み取れた。

「恥ずかしいから見に来るな」

と言われているので、見に行ったら憤慨するだろうなあと思い、無視して友達と色々見て回ることにした。

そうして、しばらく歩き回ったころ。

ふと、目の端に気になるものを見つけた。

“写真部 作品展覧会”

写真部に入っているの。

と、ひこのことを不意に思い出した。

「先に行つて。すぐ戻るから」

そう言って、友人と分かれ、こっそりとその展覧会場に足を踏み入れた。

百枚、いや、それ以上あるのではないかと思われる。写真がずらりと並んでいた。

どれもこれも、素敵で綺麗で楽しくて、見る者の目を奪った。

写真の隅に、小さく撮影者の名前がある。その中で何枚も何枚も、ひことこの作品を見つけた。

ずっと奥まで、写真を見ながら進んでいく。すると、一番奥の方に、一段大きな写真が飾ってあるのが見えた。

近づいてみる。壁にずらりと飾られた、十枚ほどの写真たち。一つ一つに番号が付き、撮影者と、その写真のタイトルが書かれている。上の方に、“写真コンテスト 選出作品”と看板がある。

その中に、見つけた。

たくさんひまわりと、その前に立つ少女 花栄の写真。

あの日の写真だった。

太陽の光、空の青、黄色、茶色、緑。うっとりするような、誰でもため息をつくような、綺麗な写真だった。花栄もそれを見て、ため息をついた。

なんてきれいなんだろう。

写真のタイトルを見てみる。

『風に呼ばれて (1-E 九重 ひこと)』

あの日、風に呼ばれたのはひことの方だったのだろう。そして、花栄とひまわりたちを見つけた。

単純に嬉しかった。

自然に、ごく自然に、笑みがこぼれた。

「……あ！」

突如、後ろから声がした。懐かしい声。振り向くと案の定、ひとだった。

「来てくれたの。嬉しいな」

「コンテストに出したんだね。すごくきれい」

「ありがとう」

ふふつと笑って、ひことも愛おしそうに写真を眺めた。

手元には、あの日と同じカメラが握られている。

「あのね、この写真、優勝しちゃった」

「……え？ 優勝？」

「そ。二位と大きく差をつけて、文句なしの優勝。さっき、表彰式が終わったところよ」

そうだったんだ、と呟いて、また笑顔になる。確かに、この写真は優勝できると、素直に思った。

あ、そうだと、ひことが持っていたカメラを、花栄に差し出した。

「これ……もらってくれないかな」

「え？ どうして？」

「優勝しちゃったらね、新しいカメラもらっちゃって。……迷惑かな？」

おそろおそろ手に取ってみる。まだ新しい。上下左右と眺め回していたら、だんだんと嬉しさがこみ上げてきた。

「もらって、いいの？」

「いいよ。君なら、あげてもいいと思って」

「うん……ありがとう！」

手の中、重みのある銀色のデジタルカメラ。嬉しくて嬉しくて、

ぎゅっと抱きしめた。

それを見て、ひことも嬉しそうに笑った。

花栄は思った。自分も、こんな綺麗な写真が撮りたい。

「あのね、私、ひことお姉ちゃんみたいになりたい」

「そっかあ……。うん、がんばれ」

笑いあって、もう一度、ふたりで写真を見つめた。

あれから六年が過ぎた。

また、ひまわりが咲いた。

高一の花栄の背と同じくらいの黄色い花は、今日も太陽を見上げるように、風に揺れている。

前方に、小学生の女の子が、小さなジョウロでひまわりに水をあげていた。

あの日からずっと使い続けているデジタルカメラ。銀色が淀んでも、花栄の宝物であることは変わらない。

そのカメラで、その瞬間を四角く切り取る。

女の子がこちらを振り返った。

優しく笑ってみる。声をかける。

「こんにちは」

「……こんにちは」

「私は島津花栄。写真部に入っているの」

(後書き)

二年ほど前に、「写真」という題材で、友人と短編小説を書きあって作った作品です。

あの頃のほうが表現がうまかったような気がします。初心、忘るる勿れ。てことですかね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3316h/>

風に呼ばれて

2010年10月11日01時01分発行